

不思議な森のクリスマス

ヒログッドフィールド

私は暖房のしっかり効いたお洒落な客室の窓から、バルコニーの脇に立っている照明に映る夜の雪を見ていた。東京で見えるような隙間をいっぱい空けながら降る雪じゃなくて、幾層にも連なった透明な白いカーテンのような雪。この宿は札幌からそんなに離れていないのに、自然の森の中にコテージが幾つもあって、しかもお互いに見えないように配置されていて、まるで深い原始林の中にポツンと一人住んでいるような錯覚に浸らせてくれる。宿泊費はそれなりに高かったが今の私にはお金のことなんか大した問題じゃない。そんなことよりも私はどこかへ逃げたかった。会社からも、煩わしい人間関係からも、そしてあの男からも。

私は冷蔵庫を開けると、用意されていたお洒落なまん丸い氷を取り出してグラスに入れると、これもまた宿に置いてある飲み放題の高級ウイスキーの封を開け、トクトクとまるでお酒のコマーシャルそのままに注ぎ入れる。

ホテルの本館での豪華な夕食は辞退して、それでも不審がられると面倒だったので勧められるままにコテージの方に軽い夕食を運んでもらったが食べる気にはなれない。傍のステレオセットにはいろんなジャンルのCDも置いてある。いつもは聴かないジャズでもかけてみようかと思っただけど、やめた。格好をつけたってしょうがない。どうせ私は今晚死ぬのだ。そして、その為の薬はもうテーブルの上に広げて準備してある。

若い頃は夢があった。だから何でも耐えられた。いや耐える必要もなかった。希望が全てを光らせてくれたから。しかしその希望も念願の会社に入ってからは徐々に萎んでいった。私が望んでいた仕事とは全く違う部署に回され、セクハラ、パワハラ満載の上司達に囲まれ息も出来ないほど辛くなっていった。そんな時、あなたが目の前に現れた。関連会社からの出向でうちの会社に初めて来たというあなたは人懐っこくて、私は目の前の闇が少し開かれたような気がした。私たちはだんだんと惹かれ合い、食事をするようになり、私はあなたに付き合い、飲めなかったお酒も飲むようになった。そして私は初めて男の人に抱かれた。それからしばらくは有頂天だった。あなたが他にも付き合っている人がいると知るまでは。

それも一人や二人じゃなかった。私が社内にも親しい友人でもいれば、あの男は業界でも有名な遊び人だということくらい容易に知れたはずなのに、私は一人ぼっちでも何もわからないでいた。そして私の世間知らずを皆で密かに笑っていたに違いない。

私の心はペシヤンコになった。酸素不足の金魚のように必死に息をした。

男の正体を知ってしばらくして、私は会社にも親にも連絡せず東京を脱出し、放浪し、そして最後に私はここまで流れ着いたのだ。

大きな窓の横にテーブルと椅子を移動させ、深雪の森を眺めながらグラスの中の液体を何回か口に運ぶうちに、私は次第に過去の記憶の中に入り込んでいた。大

学、高校、中学校、走馬灯のように今までの人生をどんどん遡っていく。そしてそれは確か小学の年性の時の記憶だった。クラスに一人、病弱で、どちらの足かは忘れたが片足が不自由な男の子がいた。色が真っ白で、日焼けが自慢のクラスの男の子達からは、「女みたいで気色悪い」「幽霊みたい」とからかわれ、また面長で鼻筋が通っていたからか、「キツネ」などと呼ばれていじめられていた。私はどちらかといえば色黒だったので、透き通るような肌のその子を羨ましく思っていたが、やはり皆と同じように障害を持ったその子を少しさげすんでいた。

今思うと、私のような、どん臭くて頭も大して良くなく、かと言って運動神経だって鈍い人間が他の誰かを蔑むなんて考えられない事だけど、私は皆と同じ事をする事で自分を守っていたのかも知れない。子供には残酷な一面がある。

私は自分自身がいじめられながら、その一方で残酷な子供の一人だった。それでも、その足の不自由な子は私の右斜め後ろの席から、よく消しゴムの切れ端をポンと私の目の前に飛ばし、驚いて後ろを向く私に、はにかんで片目をつぶって見せた。しかしまだ子供の私にはその意味がわからなかった。あの子は、そう、彼の名前はマモル、確か神谷守だ。名前を思い出すと彼の顔も鮮明に浮かび上がった。今考えればなかなかハンサムな男の子だったと思うけど、クラスの雰囲気には私は押し流されていた。でもその守君は、同じようにいじめられている私に親近感を持ったのか、時々そんなふうに私にちょっかいを出してきた。ある時彼は筆箱を忘れたか

ら鉛筆を貸してくれないか、と言ってきたので、私は皆に見られないようにこっそりと彼の手の中に鉛筆を握らせた。守君が嬉しそうに微笑んだその時

「あっ、キヨコとマモルが手をつないでる！こいつらできてるぞ！」

と声がして、皆が一斉にこちらを見た。守君が慌てて手を離すと鉛筆が悲しい音を立てて床に転がった。守君は顔を真っ赤しながら声の主を睨みつけた。しかしその眼は怒りではなく悲しみに満ちていて、私はなぜかその顔を美しいと思って眺めていた。睨まれた生徒は

「おっかねえ、野生のキツネだ、いや、九尾の狐だ〜」

と茶化したのが、私には守君がキツネに似てるとは到底思えなかったし、その時は誰も笑わなかった。

しかし、それ以来彼は私にも声をかけなくなり、やがて障害者用の施設が完備してある学校に転校して行ってしまった。

そこまで思い出した時、ドアのノックが聞こえた。私はウイスキーグラスをテーブルに置き、薬を見えないように隠すと「はい」と玄関に向かう。

「どなたですか」

とドア越しに聞くとフロントの者ですと答えたのでドアを開ける。

そこには体格の良い若々しいハンサムな青年がホテルの制服を着て立っていた。

「何か御用ですか」

私が聞くと

「わかりませんか？」

と青年は私に微笑みかける。訳がわからず「はい？」と聞き返すと彼は

「船橋希代子さんですよ、ごめんなさいフロントで名簿に名前を見つけたもので、つい懐かしくて」

船橋希代子は私の本名だ。おそらく私を知っている誰かだろうけど、と思いつけないでいると彼は制服の胸に掛かっている名札を指差した。

「神谷守」

とそこにはあった。

えっ、と顔を上げて彼の顔を見直す。すっと通った鼻筋と涼しげな端正な目元で守君が甦った。

「守君？いやだ、どうして、なんでここに？」

「あはは、それはこっちのセリフだよキヨコちゃん。お久しぶり、何年ぶりかな、元気にやってる？」

最後の質問には答えず、いや答えられずに私は葉を机の引き出しにしまう間、彼を玄関に待たしてから部屋に招き入れた。部屋を薄暗くしていたので、守君に椅子を勧めながら照明を明るくしようとした時、彼は少し慌てたように

「ごめん、あまり明るくしないで、あ、いや別に変な意味じゃなくて、その、僕、

眩しいのが苦手なんだ」

私と同学年だから25.6才にはなるはずの男性が自分を「僕」と呼ぶのに少し違和感を覚えたが、この辺りでは普通なのかも知れない。

守君は照れ笑いをして

「こんなところで会えるなんて夢にも思ってたけど会えて本当に良かった、僕、一度会ってキヨコちゃんにお礼を言いたかったんだ」

部屋をそれ以上明るくするのをやめて守君用のグラスを準備していた私に向かって彼はそう言うので

「え？私に？なんで？」

と、さっきまで考えていた残酷な自分を思い出して、私はどきっとする。

「だってキヨコちゃん、僕に優しくしてくれたでしょう。僕すごく嬉しかったんだ。忘れ物が多かった僕によく文房具を貸してくれたよね」

「え、そうだった？」

私は一回しか貸した覚えはない。しかも途中でみんなに冷やかされて彼は鉛筆を床に落とした。そのいやな音を私は今でもはっきりと覚えている。

「クラスの皆さんも病気の僕に優しくしてくれたけど、実は僕、キヨコちゃんの事が好きだったんだよ。だからキヨコちゃんに優しくされると特別に嬉しかった」

私はビクビクして守君の顔を見た。守君はクラスの皆さんにいじめられていた。

私も守君をかばって優しくするどころか皆に同調して冷たくしていたはずだった。

私はもう一度守君を見つめたけど、嫌味や皮肉を言っているようには到底見えなかった。むしろその顔は昔のことを純粹に喜んで感謝している風に見えた。私は守君の為に水割りを作ると

「実はね守君、さっきまであなたのことを思い出していたのよ、そしたらドアのノックが聞こえて…こんな不思議な事が世の中にはあるのね、でも素敵な男性になっていてよかった。神谷君は中学校へ行ってから病気が悪化して、もうだめだと…」
私はそこまで言って話題を止めた。

「とにかく、久しぶりの再会を祝いましょ、はい、乾杯！」

「うん、乾杯！僕お酒は初めて飲んだ、どんな味なんだろう」

守君はいきなり水を飲むようにグラスを傾けると、想像通りに激しくむせた。

私は慌ててお風呂場からバスタオルを持ってくるとウイスキーのこぼれた床を拭き、咳き込んでいる彼の背中をさすった。なんだか不思議な感触がした。

「ごほ、キヨコちゃん、ごほ、ゴメンね」

私は守君の背中をさすりながらその内に笑いが止まらなくなった。

「もう、どうしたっていうのよ、今どきこの歳になってお酒の飲み方も知らないなんて、笑っちゃう、可笑しいわ」

久しぶりに心から笑うと守君は苦しそうに涙目で私に謝っているようだった。

そのことで妙な緊張が解けたのか、私は子供そのままのような彼にすっかり心を許し、お酒の力もあって自分の全てを洗いざらい喋った。

そして何時間話をしたのだろう、冷たい風が顔に当たり、気がつくとは私はテーブルの上に突っ伏して眠ってしまっていた。寒い筈だ、バルコニーのサッシが少し開いて隙間風が入ってきている。

そうだ、私は守君とお酒を飲んでいたんだ、と思い出し

「守君？部屋にいる？」と呼んでみたが返事は無かった。開いていたサッシを閉め、時計を見るともう夜中の一時だった。フロントに行けば守君がまだいるかも知れない、と私はコートを羽織ると部屋を出て別棟のフロントに向かった。部屋を出る時に鍵が掛かっていたのが少し気になったが、守君を部屋に入れた後、私が用心のためにロックしたのだろう。外に出るともう雪はやんでいた。空には東京では見られない天の川が冬にしては綺麗にその姿を表していて、私はしばらく足を止めてその美しさに見入った。考えてみれば、夜空を見上げてこんな深い息をしたのはいつぶりだろう。澄んだ冷たい空気が心地よく肺の奥に流れ込んで来る。

「すみません」

ホテル本館の自動ドアを通り、誰もいないフロントから奥の部屋に声をかける。

「はい」と部屋から出てきた男性は守君ではなかった。

「どうかいたしましたか」

こんな夜中にフロントにわざわざ女性客が一人で来るのはただことでは無い、とその若いホテルマンは不安そうに私を見る。

「あの、守君、いや、神谷さんはまだいらっしやいますでしょうか」

「え、と、神谷ですか？」

「はい、こちらの従業員の神谷守さんですが…もし宿舎か何かに戻られたなら、また明日出直すのでそうお伝えくださいますか」

ホテルマンは少し考えた後

「申し訳ありませんが、うちのホテルにはそのような名前の者はおりませんが…」
と言って当惑した。

「いや、そんなはずはありません、さっきまで…」

そこまで言って、私は中学生の時、親から

「あなたの小学校の同級生の神谷君で、やっぱり病気で亡くなったんですってね」
と言われたことを克明に思い出した。

「すみません、私、なんだか寝ぼけてたみたいで」

怪訝そうな顔のホテルマンをフロントに残したまま私は部屋に戻った。不思議と怖くは無かった。さっき守君と話しながら、私は意識的に思考をストップさせたのかも知れない。潜在意識の中では事実を知っていたのかも知れないが、それでも私は彼と一緒にいたかったのかも知れない。私はお酒の残った頭でぼんやり考えてい

た。一人薄暗い部屋にいても怖くは無かった。むしろ暖かいものが胸を包み込んで私は涙を流した。何時間も、何時間もこんなにも涙が身体にあるのかと思うほどたくさんの涙が流れ出た。

「ごめんね、そしてありがとう守君」

私は泣いたまま眠った。

翌日、私の心は信じられないくらい軽くなっていた。持ってきた大量の薬は全て廃棄した。私は一体何を思い悩んでいたのだろう、生きているんだから別の道を歩けばいいだけじゃない、会社をやめて、家に戻ってまた夢を追いかければいいじゃない、今まで私の心を潰していた大きな塊がなんの意味もない小さなものに思えた。守君のように人に感謝して、彼の生きられなかった分も生きてみよう、そんな勇気が湧いた。そうしたら、もうすぐクリスマスだということを私は思い出した。

「そうだ、今度のクリスマスは家に帰ろう。初めて親に何かプレゼントを買おう」

私は今まで親に何も感謝したことが無かったことに驚いた。親が子供を愛するのは当たり前前で感謝なんてするものじゃないと自然に思っていた。我儘放題で、外で虐められたり、嫌な事があると親に八つ当たりをしていた。そして、挙句の果ては自殺なんて、自分のことしか考えていなかったことを生まれて初めて恥ずかしいと思った。

私は久しぶりに朝食をちゃんと取り、タクシーを呼んでもらい駅の名前を告げる。昨夜のことはもう夢でも幻でも何でも良かった。車は真っ白な世界をまるで雲の中を飛んでいるように走って行く。そして冬の北海道の空はまるで今の私の心のようには晴れ渡ってどこまでも青く、雪に半分埋もれた森はキラキラと輝いている。「綺麗」と思ったその時、何か動く物が目に入った。

「キツネだ」

思わず口にする

「ああ、この辺でもいるんですね、北キツネ。お客さんラッキーですよ、私らだつてめったに見れないのに」

まるで待ち伏せしていたようにたたずんでいたキツネはタクシーを見つけると、雪の中をこちらに向かって走り出した。思わず窓を開けようとする、運転手さんが暖房が効かなくなりますよ、と言うので仕方なく閉める。私は何故か一生懸命に走るキツネの後ろ足が気になったが何も問題はなさそうだった。キツネはしばらくタクシーの横を距離を置いて元気に走っていたが、スピードを上げる車に追いつかなくなると、すっと立ち止まり、こちらに首を真っ直ぐに伸ばして片目をつぶって見せた。私はそれを見て確信した。タクシーの暖房で、すぐに曇りそうになる車の窓を必死に指で拭き続けながら

「素敵なクリスマスプレゼントありがとう」と心の中で北キツネに、いや、守君

に、雪の中でたたずむ姿が見えなくなるまで何度も何度もお礼を言った。

「あら、こんなところに金髪が落ちてるよ」

ルームクリーニングの年配の女性が金色の髪の毛のようなものをつまみ上げると

「最近は何人さん見えてないのにねえ、不思議ねえ」

と、もう一人の従業員の女性が作業をしながら答えた。

「これ、なんだかキツネの毛みたい、ほら何本も床に落ちてるよ」

「あれま、ウイスキーも床にこぼれてたし、キツネさんがこの部屋でクリスマスパ

ーティーでもしたのかね」

女性の笑い声の漏れるコテージの、そのすぐ横を一匹のキタキツネが雪を楽しむように転げ回り、走り回った。そして一度大きくジャンプをすると、木漏れ日漏れる冬の森の中にふっと消えた。そして雪の上に残るその足跡を辿ると、最後にはあのコテージの、森の見える大きなサッシに向かって真っ直ぐと伸びているのだった。

完